

研究授業通信

古枝小学校
研究主任 松林 諒
令和四年度 5月16日

3年生「マット運動」

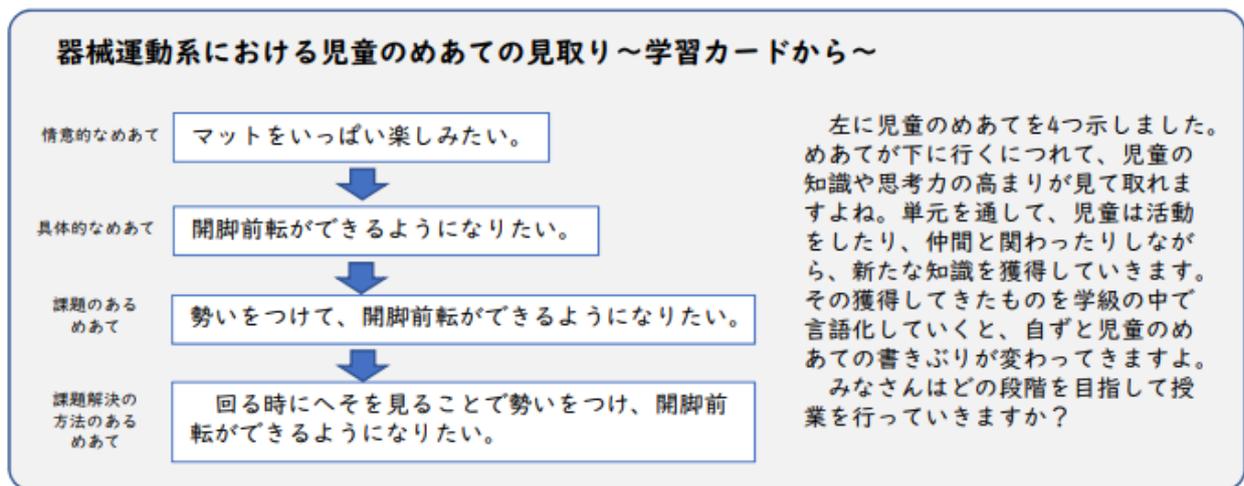
第1回目の授業研究は、3年生のマット運動を行いました。

研究の内容①「学習カード」・・・めあてを立てやすい学習カード。完結にわかりやすく！

はじめに学習カードについてです。下学年の子ども達なので、できるだけ1枚の学習カードで完結できるようにしたいと考えました。技の系統表（技が種類ごと、難易度ごとに紹介されている表）とめあて・ふり返りを書く用紙を1枚にして学習カードとしました。そうしたことで、全ての子どもたちが、単元の見通しを持ちながら、本時で取り組む技（めあて）をスムーズに決めることができました。

めあての書き方については『体育指導ハンドブック』のP40に、めあての書かせ方が示されています。3年生では「わからない人は一生懸命頑張るとか、友達と一緒に頑張るでもいいよ。書ける人はどんなことに気を付けて頑張るか書いてごらん」と初めに伝えています。毎時間、高いレベルのめあての書き方をしている児童のめあてを紹介しました。そうすれば少しずつ子どもたちのめあての書き方も変わっていきます。

4 授業づくりのポイント



-40-

研究の内容②「めあて・ふり返り」・・・同じ技に取り組んだ児童でふり返りの共有

研究内容の①でめあてとからめた内容を書かせていただいたので、次はふり返りについてです。ふり返りは、グループでのふり返りをしたあとで、個人のふり返りを行いました。今回めあて2で、同じ技に取り組んだ児童でグループを作り、ふり返りを共有する活動を取り入れました。3年生でどのぐらいのことが書けるのか、そもそも書くことができるのか、そんな時間はあるのか、不安要素はたくさんありましたが、子どもたちは5分間一生懸命話し合いながら、活動する中で難しかったポイントと見つけた技のコツの2つをある程度の言葉で書くことができました。クラスの中には、活動する中で何かしらの感覚や思いのような漠然とした成果は感じていても、言葉として表現する

のが難しいという児童がいます。そんな児童にとっては、ふり返りを共有する時間を設定することで、みんなからアウトプットされた言葉で思考が整理され、次の活動につながるなと感じました。

ふり返りを書かせる時には、「ふり返りは、このミニホワイトボードに3つ書きます。まずは、技の名前を書きましょう。そして、2つ目は△印で技の難しかったところを書きましょう。3つ目は、○印でこうすれば良さそう！などのコツ書きましょう。5分間で書ける分です。書けたグループから、前のホワイトボードに貼りに来てね」と言って、2時目に初めて書かせてみました。その時は8つのグループのうち、6つのグループが2つのふり返りを書くことができました。本時では、11のグループができ、全てのグループが2つのふり返りを書くことができました。明確にめあてを持って活動できていた証拠だと思います。時数を重ねるにつれて、上手なグループの書き方を真似したり、活動中にふり返りボードを見たりすることで、少しずつ書きぶりや内容が変化していきます。

研究の内容③「教材・教具の工夫」・・・児童の必要感に応じて

最後は教材・教具についてです。今回は、工夫された練習の場をめあて1の活動の段階から出しておき、子どもたちがいろいろな場で活動するなかで、子ども自身がその場の有効性を肌で感じることで、めあて2の技に取り組むときに、自分で必要感に応じた場を選択しやすくするという狙いをもって、場の設定をしていました。場を上手に活用している児童がいたり、自分たちで練習の場を増やしたりする児童がたくさんいたことは主体的な姿としてとても良かったと思います。また、できない技に挑戦するときの活動の仕方についても子どもたちには提示をしていました。その中の一つとして、ヒントカードを準備していました。このヒントカードはたくさんの児童が適宜活用し、ヒントを得ていたようでした。

工夫された練習の場や練習の方法については、いっぺんに全ての引き出しを出す必要はありません。子ども達の必要感に応じて適宜小出しにしていきたいと思います。できていないから提示するのではなく、困ってから提示するようにしましょう。もしくは、子どもたちの活動が停滞してきた（飽きてきた）と感じたときに、ワクワクする場を提示してあげれば良いと思います。体育の先輩先生方からは「がまん」とよく言われていました。

参観していただいた先生方からのご意見・ご質問

教師の見取りについて

児童の活動を教師が見取りやすくしたり、児童が自分の活動を明確にしたりするためにも、帽子の色を変えることやネームカードを貼るなどの視覚的に分かりやすい工夫をすればというご意見をいただきました。教師の見取りについては、体育は非常に難しいです。それぞれが違うめあてを持って、場を移動しながら活動するので、全ての児童を毎時間見取ることは不可能です。ですので、体育科では評価する項目や支援に入る児童をある程度定めておくことで、見取りがしやすくなります。支援に入る児童を選ぶヒントとなるのが、前時の活動の見取りと児童の学習カードです。

危険を伴う技について

倒立に取り組んでいる児童を見てとても怖かったという感想をいただきました。確かに、大きなケガにつながる可能性がある技ですので、事前の指導が必要になります。マット運動や跳び箱運動で必要な事前の指導としては、①着手の仕方の指導②場の安全確認の指導③技の系統性の指導の3つかと思います。事前の指導と発達段階に応じた支援をした上で、どんどん取り組ませてほしいと思います！特に低学年のうちに様々な動きを経験しておくことはとても大切なことです。きっと大丈夫ではなく、もしも・・・という気持ちで指導しないといけないと改めて確認することができました。

単元を通した技の取り組み方について

単元の初めに、単元を通して身に付けたい技に印を付けさせることのメリットとリスクについてご意見をいただきました。単元の最後の自分の姿をイメージすることで、そのためにこの時間はこの技、この時間はこの技というように、見通しを持って毎時間の活動に一生懸命に取り組むことができることはとてもいいことです。しかしながら、もし計画していた通りに、技を獲得できなかった時に、それでも次の技に取り組むのか、もう一時間同じ技に取り組むのかは、児童の中で考えさせる必要があると思います。前時のふり返りを生かして、もう一時間挑戦することがいいのか、それとも他の技に挑戦した方ができる技を増やすことにつながるのか、児童に2つの選択肢を提示してあげることが、さらに児童の主体性を高めることにつながると考えます。

教材の工夫について

児童が活用できる工夫グッズのようなものを、準備しておけばというご意見をいただきました。3時目ということで、まだまだ工夫した場の数や手立ては多くありませんでしたが、例えば手の形に切った画用紙を準備したり、目線の印を準備したり、ゴム紐を準備したりして、児童がいつでも活用できるようにしておけば、いろいろな道具を試しながら、自分に必要な教具を選択し、技を主体的に獲得していく「個別最適な学び」に繋がると思いました。

できたの基準について

子どもたちが「先生できたので見てください」と言ってきます。すごく上手にできている子もいれば、まだまだ完成度は低いなと感じる子もいます。その時に技ごとのある程度統一した基準を設けるべきなのか子どもによって差があってもいいのかというご質問をいただきました。個人的には、教師が提示した「きちんと着手して（安全面）、ピタっと2秒止まる」（運動の一般的特性をもとに児童が運動を楽しめている）ことができているならば、「できた」でいいのではないかと思います。めあて2で、できたの基準をクリアした技を、めあて1でレベルアップしていくという流れがスパイラル型の学習になります。できたの基準を自己判断できるようにわかりやすく提示してあげることが大切だと思います。そうすれば、子どもたちは主体的に運動に取り組めるようになると思います。

貴重なご意見ありがとうございました。これからの授業実践に生かしていきましょう。次回は、5月18日（水）4時間目に6年生の「跳び箱運動」を柿原先生に提案していただきます。可能な先生方は、是非参観をお願いします。